

森崎信尋 著「小林秀雄の脳を覗く」 — 辺縁系的な生の批評家 —

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 當銘 正彦



私の大学時代の同期生（千葉大学 '75年卒）に、斯くも文芸的な領域で憧憬の深い者が居ることに先ずは驚いた。著者の森崎君とは学生時代にまともな会話を交わした記憶は無く、大学卒業以来も全く会ったことはないが、細い目に黒縁の眼鏡をかけた物静かな風貌だけは今でもしっかりと記憶している。

略歴をみると糖尿病や脂質代謝、動脈硬化等を専門とする内科医の道を歩んだようであるが、数多の著書を見てみると、どうも医学的な専門著作よりも文芸的な著作が多いようである。平成11年から大学勤務を止めて診療所勤務になっていることが、文芸的な分野にまで文筆活動を可能にしているのだろうか。

本書は先ず、脳の生物学的進化と心の関係から解きほぐす。脳として、最も原始的な機能を司るのは原始は虫類脳（血圧、循環、呼吸、反射などを調節）であり、次いでほ乳類に進化して出現したのが大脳辺縁系（旧ほ乳類脳；感情・情動などを司る）で、更にほ乳類が進化して行く中で最後に現れたのが新ほ乳類脳（大脳新皮質；知性を司る）であるが、この大脳新皮質こそは霊長類で、中でもヒトで特徴的に発達した脳である。

進化した動物の心が「辺縁系」と「新皮質」に宿っていることは確実であると考えるが、「辺縁系」は「は虫類脳」を取り巻いて存在し、遺伝的制約の強い「は虫類脳」の働きを柔軟に制御し、感情・情動の座として機能しつつ、個体保持および種族保存のための複雑な行動を更に正確なものにする。一方「新皮質」は、遺伝に規定されている行動プログラムを超えて比較的自由的な働きができる。即ち、外部環境因子を

「非情動的」に分析・抽象化し、高度の創造活動を行う。この「辺縁系」と「新皮質」との相互連絡は高等動物ほど発達し、情動行動が更に複雑になって来る仕組みである。

さて本書の主題である小林秀雄の脳であるが、徹底した「辺縁系」優位の思考法が小林の特長であると著者は力説する。小林と云えば、幅広い知識と深い洞察力を駆使して、難解ではあるが味わい深い評論を量産し、マイナーと云われた文芸評論を一躍、脚光を浴びる文壇の一つのジャンルとして確立した泰斗である。国語の試験問題としても小林の文章は汎用されており、文芸には興味のない者でも、小林の文章には度々遭遇している筈である。日本の文壇における小林の扱いは毀誉褒貶と様々ではあるが、その影響力と存在感は巨星のごとくであり、私自身はかじり読み程度であるが、どうしても避けて通れない作家の一人として強く意識して来た。

本論に戻るが、著者によると小林は、方法論的に学者の一般的な手法である「論理」を多用するのではなく、「直感に信を置いた」という。小林は論理や理屈で分かるものや科学で分析されるものをつまらないと感じるからこそ直感を重用した。小林にとって、直感＝「辺縁系」とらえる価値あるものは、「新皮質」ではとらえがたいにも関わらず、それが全体像として、「一幅の絵」として「鮮明」に表れてくるものであった。小林の記述に垣間見る「人間の性質のうちにある、言うに言われぬ或る恒常的なもの」、「これを感じ得る時は驚くほど簡明だが、これを説明しようと思えば、忽ち無闇な迷宮と変ずる」、或いは「歴史や社会の動きの裡に全体的に解消してう事のできない人間の本質な

//////////////////////////////// 本の紹介 //////////////////////////////////

り価値」等々から、著者は小林の認識論は「直感」を基底とする「辺縁系的」なものであると確信する。

そして、小林にとってドストエフスキーを批評することは宿命であった、と。何故なら、「新皮質的なもの」よりも「辺縁系的なもの」を根幹において批評を展開する小林にとって、「新皮質的なもの」の背後に濃厚な「辺縁系的なもの」を真理として小説を描くドストエフスキーは、必然的に小林のライフワークの対象となってくる。

このような基本的な認識を基に、著者は「罪と罰」という作品を通して、小林のドストエフスキー論を解説し、巨頭と言われる二人の脳内の医学的な散策を試みている。

魂を揺さぶる偉大な芸術とは、脳生理学的に解釈すると「新皮質」の機能は脇役であり、生命維持の根源に近い「辺縁系」の発露として表現されるものかと、この本を読んで一人合点した想いである。ともあれ、医師の視点を介

して考察した本書は、小林秀雄、ドストエフスキーの世界を回想する興味深い一冊に仕上がっている。



近代文芸社

原稿募集！

本の紹介コーナー（1,500字程度）

感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介します。

原稿募集！

プライマリ・ケアコーナー（2,500字程度）

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。奮ってご投稿下さい。

原稿募集のご案内

広報委員会

沖縄県医師会報は皆さまの会報です。
広報委員会では、会員の皆さまからの原稿を多方面にわたり募集いたします。活発な御投稿をお待ちいたしております。

●分科会、研究会等からの報告（1,000字程度）

分科会、研究会等が本県に於いて開催する、九州規模以上の学会の開催案内、また、開催後の報告等について御寄稿をお願いします。

●質問コーナー

- ・日常診療の中での疑問、診療のポイント、医師会活動、税制（税務）、健康保険等について質問を受け付けます。
- ・質問は「沖縄県医師会広報委員会」宛に、住所、氏名を明記の上、文書でお願いします。
- ・誌上匿名は可です。
- ・回答者を指定されても結構です。

●発言席

会員の皆さまの御意見、主張を掲載します。

●随筆（2,500字以内）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

●「いきいきグループ紹介」（1,000字程度）

各研究会、スポーツ同好会や模合等の活動紹介などを掲載致しますので、どうぞお気軽にご紹介下さい。

●勤務医のページ

勤務医の立場を明確にして筆者を希望なさる方のコーナーです。若い先生方から御意見、御投稿を期待します。

●甘口・辛口コーナー

医師会の活動とか社会に対し、本音で発言できないことや恨み・つらみ何でも結構ですでお気軽に御投稿下さい。

- ・誌上匿名・ペンネームでも可。
- ・内容的に会報記事として適当でない場合は、広報委員会で協議し、掲載を見合わせる事もありますのでご了承下さい。

●若手コーナー（1,500字程度）

今後の進路を決める若手医師へのアドバイス等について御投稿下さい。（若手医師への提言、日常診療のコツ、開業顛末記等。）

●身近な闘病記（2,000字程度）

ご自身又はご家族の病気療養の経験談について、会員の皆様からの御寄稿を募っております。

●ロゴマークは語る（400字内）

医療機関のロゴマークとそのつけた由来、趣意等について掲載致します。

●本の紹介コーナー（1,500字程度）

感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介ください。

本会報の編集は沖縄県医師会広報委員会内規の編集方法に基づいてなされます。
（内規は平成21年12月号（106ページ）に掲載）

※原稿送付先

〒901-1105

南風原町字新川218-9

沖縄県医師会広報委員会宛